

『また、桜の国で』祥伝社
須賀 しのぶ／著

1938年、ポーランドの日本大使館に着任した外務書記生の慎^{まこと}。ロシア人の父を持つ彼は、かつて日本が救済した元孤児たちの協力を得て、戦争回避に向け奔走するが、ついに戦争が勃発。世界情勢は混迷を深めていく。よみがえる幼き日の孤児との巡り合い、国や友への思いが交錯する中、やがて慎はある決意をする。



大国に挟まれ、過酷な運命に翻弄^{ほんろう}されてきた歴史を持つポーランド。知られざる日本との友好、戦時下でも国を越えて誇り高く生きた人びとの物語が、史実を交えながら迫真の筆致で描かれる。全編を通じて流れるショパンの「革命のエチュード」から民族の誇りと慟哭^{どうこく}が聴こえる。